

若年無業者支援者の自己の様相

——地域若者サポートステーションの支援者を事例として——

東洋大学 小川祐喜子

1. 目的

「地域若者サポートステーション」(以下「サポステ」と表記)とは、2006年に開始された厚生労働省の委託事業である。その内容とは、15歳～39歳までの若年無業者を対象にキャリア・コンサルタントや臨床心理士などの専門的な相談、各種セミナーなど、就労に向けた支援を実施する事業である。しかしその認知度は、2006年の開始以来10年が経っても高いとはいえない(宮本,2017:74)。また、他の機関が引き受け困難なケースなどは、国の基準から外れる場合でも、「サポステ」が引き受けるケースが少なくない。それは、行政が求める就労率の評価基準とせめぎ合うものであり、支援の場で矛盾状態を引き起こしている。つまり「サポステ」支援者は、単年度事業を継続していくために就労率達成が求められ、他方ではなかなか就労には結びつかない若年無業者を支援しなければならない状況下にある。

しかしこれまでの研究によると、支援者が若年無業者就労支援を「善意」の行為と認識し、若者からの肯定的な反応が自己への報酬へと転換されている様子が見出された。そこで本報告では、「サポステ」支援者の「感情労働」のケースを手がかりに、自己の様相を明らかにしていく。

2. 方法

本報告では、半構造化されたインタビュー調査のデータを一部抜粋したものを使用する。インタビュー調査は、2016年9月～2017年2月に「サポステ」支援者を対象に実施したものである。

3. 結果と結論

ユースワーカーである「サポステ」支援者からは、若者と対等で支援を行っている語りが見られた。「支援者は、支援する人と支援される人にわかれるが、ユースワーカーは双方向的」である。支援者は、「(若者を)僕らが何とかしようではなく、本人の思いを組んで、(ともに)何とかしてあげよう」と語り、自分が何とかしようという意識で支援を行っていない。また、支援者に関するやりがいでは、「ともに成長を感じることができたとき」というように、自己主体のやりがいではなく、ユースワーカーと若者の双方の関係からやりがいを見出していたと考えられる。さらに対価についても「成長ややりがい」、「やりたいことをやっていることも対価かもしれません」と語っており、金銭的なものは重視していないことが明らかとなった。

他方、支援を通してユースワーカーが感じる「感情」についての語りでは、「感情は表現しているし、言葉にしている」。また支援者の感情として、怒ったり、喜んだり、嬉しかったり、悔しいと感じることもある。またそれらの感情は、「例えば、しんどいと言っている人がいても、そのしんどさは僕のものではないので、僕がしんどいと感じるのは違うと思う」という語りなどから、ユースワーカーが自分と他者との感情を意識し、認識し、分類し、感情を自分の言葉で認識している様相が見られた。それは、感情の内省である「自己内省的感情」(船津, 2008)を実証的に明らかにする手がかりであり、「自分自身との相互作用」をとおして、既存の感情が表示され、解釈され、新しい感情が創発された支援者の自己の様相を捉える手がかりになるといえる。

文献

船津衛,2008,「自己感情論の展開」,『放送大学研究年報』,第26号,67-75頁

宮本みち子,2017,「労働政策の展望 若年無業者政策と課題」,『日本労働研究雑誌』,72-75頁

*本報告は、東洋大学平成28年度井上円了記念研究助成「『自己意識的感情』研究からみる若年無業者支援者の自我の様相——支援者の『感情労働』の現状を手がかりに——」の研究成果の一部である。